

## 新しい中学校のビジョンの探究 「夢のある、明るい中学校」をめざして

中学校統合推進委員会委員長

小林 洋文（教育長）

### 1、お礼の挨拶

みなさん、こんばんは。日に日に秋が深まり、朝夕はひときわ冷え込む季節となりました。

本日はお忙しい中、第1回富士見町立中学校統合推進委員会にお集まりいただきましてありがとうございます。これからは「富士見の中学校は一つ」になります。「富士見町も一つ」「町民としての意識も一つ」になります。

皆様に統合推進委員をお願いしましたところ、全員の方からご快諾いただきました。感謝申し上げます。また、両中学校の教職員全員が委員になっていただくことになりました。ご苦労をおかけすることになりますが、「富士見の子ども達の健やかな成長」を願って、ひとつよろしくお願い致します

さて、先ほどの経過説明にもありましたように、来年度をもって南中学校並びに富士見高原中学校を閉校し、再来年度、平成22年4月からまったく新しい統合中学校として開校するが決定されました。

矢嶋町長の挨拶にもありましたように、統合はあくまで「対等な統合」を基本方針としております。この方針を大事にしていきたいと思っております。

委員のみなさんには6月に実施した保護者の意向アンケート結果を参考資料としてお配りしましたが、このあと開かれる校名・校歌・校章・制服・通学方法等の各部会においては、既存の

中学校にとらわれず、真っ新(まさら)な状態から検討を始めてくださるようご配慮をお願い申し上げます。

## 2、「新しい理想の中学校像」について夢を共に語ろう！

(夢の実現)

いよいよ富士見町の「新しい理想の中学校像」について夢を共に語り合う日がやってきました。

先のアメリカの大統領選で、初の黒人大統領が誕生しました。

今から45年前、1963年8月28日、アメリカのワシントン広場で人種差別撤廃、各人種の融合を求める大行進を指導したマーティン・ルーサー・キング・Jr.牧師の「I have a dream.」(私には夢がある)の演説はあまりにも有名です。それから約半世紀、“change”と呼びかけ“Yes, we can”と応える国民によって、夢は実現したのです。

私たちにも、新しい中学校について夢を語り、高邁な理想の実現に向けて熱い議論を交わす時がやってきました。

中学校は進学か就職か、どこの学校に進学できるかできないか。それをとかく偏差値で判断する画一的な進路指導にとらわれがちです。私たちは、そのような中学校についての固定観念・既成概念からいったん離れて、生徒も先生も保護者も夢をもち、夢の実現に向けみんなで頑張る決意を、今日改めて新たにしようとしています。

(日本の教育の2つの課題)

理想を実現するためには、今日の日本が抱える教育の大きな課題を克服しなければなりません。

(自己肯定感が低い)

第一に、学年が進行するにつれて自信を失っていく子どもがとて多いことです。

日本の子どもたちは「自分は自分らしくあればいいんだ」とありのままの自分を認め自分に自信をもつ感情＝「自己肯定感」

が世界のどの国の子どもに比べても極端に低いという調査結果が既に1970年代からいくつも出ています。早々に自分の将来に見切りをつけ、夢をなくしていく日本の子どもたち。これは、たえず友だち同士・学校同士が比較・競争にさらされている日本の教育のあり方と無関係ではありません。

(学習意欲の低下、校外学習時間の減少)

第二に、日本の子どもの学習意欲がこの20数年間、急激に低下していることです。

かつての日本の子どもは、1980年頃までは世界一長い時間勉強し、学習意欲が高く「日本の教育に見倣え」と国際的にも高く評価されていました。しかし、その後、日本の子どもの家庭学習時間は急激に減少し、IEA(国際教育到達度評価学会)や、OECD(経済協力開発機構)が3年毎に実施しているPISA(国際学習到達度比較調査 = 「義務教育修了段階の15歳児が持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価し、かつ創造的な思考のプロセス、概念の理解、及び様々な状況でそれらを生かす力を評価する」調査)で、今や、世界で最低のレベルにまで転落していることが明らかになりました。

中学2年生の43%が自宅での学習時間がゼロ時間であるという東京との調査結果が出たのは10年前の1998年のことでした。90年代はじめのバブル経済の崩壊後に、この傾向が急速に進行しました。

2006年、OECDが実施したPISAの結果でも、学習意欲を示す項目で参加57ヶ国・地域の中で依然として最低レベルでありました。

富士見町の中学生の家庭学習時間も、文部科学省や町単独の学力・学習状況調査で、かなり短いということがわかりました。家庭学習の習慣化は喫緊の大きな課題です。

知らないことを知り、分からないことが分かるようになり、でき

なかったことができるようになることは、本来、愉しいはずで  
す。学問に王道はありません。忍耐力・継続する意志、学習意欲が  
欠かせません。

「**学びは快樂**」 そのような高みにまで子どものレベルを引き  
上げる。先生には生徒を惹きつけるスケールの大きいダイナミッ  
クな授業展開をぜひしていただきたい。期待しています。

先生と生徒が共に「**学びの快樂**」を体験できる授業は、想像す  
るだけでも楽しくなってくるではありませんか。

(夢を探し目標を見つけた時、学習意欲を取り戻す。)

「**教育とは共に希望を語ること。学ぶとは誠実を胸に刻むこ  
と**」とはフランスの詩人ルイ・アラゴンの詩の一節です。

「どんな時に勉強をやる気になりますか？」と問いかけると、中  
学生や高校生は「**自分の夢が見つかった時。将来就きたい職業  
が決まった時**」と答えます。自分の夢や目標が決まった時、叱咤  
激励しなくても、生徒は自分で走り出すものです。夢の実現のため  
なら、人に言われなくても、集中力を発揮して自発的に努力する  
ものである。

何のために勉強するのか？ 若い頃、私も自問自答しました。  
答えはすぐには見つかりませんでした。悩み続ける、考え続ける  
プロセスそれ自体が大切だったと今にして思うのです。

生徒自身が夢を見つけることを支援するのが学校であり、相  
談に乗ってあげるのが先生と親御さん、周囲の色々な人との出  
会いです。

いつも生徒に「**あなたの夢はなんですか？**」と語りかけ、生徒  
が自分の夢や目標に向かって日々切磋琢磨しながら真剣に学  
び合う。叱咤激励されて学ぶ受身の学習から、自発的に学習意  
欲を持って学ぶ。そういう先生と生徒の関係を私は夢みます。

「**Dream comes true.(夢は実現できる)**」、通称「**ドリカムの授  
業**」を週2回取って進路指導をして大きな成果を出している学校  
があります。

1年生ではどんな職業があるか探す調査の年。

2年生になると行動の年。自分の就きたいあこがれの職場を訪問し、体験する。様々な人と出会い、アドバイスを受け、激励され意欲を高める。その道の一流の人・あこがれの人との感動的な出会いは、大きな刺激になります。

3年生になると、あこがれる職業や進学を希望する高校に入学できるよう、夢の実現に向けて受験勉強をする年

私たちの新しく創りあげる中学校は、目先の受験指導よりも学校を卒業したあとの職業生活、将来を見据えた進路指導を計画的に実施する中学校教育でありたい。

そのような中学校においてこそ、学ぶ生徒は学習意欲を高め、試行錯誤を重ねながら、それぞれの夢の実現に向かって邁進するに違いありません。

(明るい職場、専門家集団 先生が変われば生徒が変わる)

生徒が生き生きとして、友だち同士が仲良く、互いに切磋琢磨して自主的に学び合う人間関係。

そして、先生も大変な仕事量をこなしながらも互いに助け合う明るい職場環境。画一的な一斉授業、詰め込み授業を脱却し各教科の専門性を十二分に発揮したメリハリのある授業が展開されるなら、生徒の集中力は途切れないことでしょう。「教師は授業で勝負」。先生が変われば生徒が変わる。生徒が変われば保護者の学校や先生に対する見方が変わる。そう信じています。

「夢のある明るい学校」、「豊かな自然に恵まれた富士見町ならではの自然主義教育など、特色のある学校」 そういう活気のある個性的な中学校の実現を目指してお互いに協力し合う姿を私は夢見ています。

会場のみなさんもきっと私と同じ願いを持っておられるだろうと思います。

### 3、教育の理念と目的

これから1年半の統合推進過程では、まず「教育とは何か」、「教育の理念」と「教育の目的」を原点に立ち戻って共に考え合うことが非常に大切ではないかと私は考えています。そういう機会はそうめったにあるものではありません。よい機会ですから、教育の理念と目的を、教育基本法では次のように述べていることを皆さんと共にこの場で確認したいと思います。

教育の理念を格調高くこう述べています。

《我々日本国民は、たゆまぬ努力で築いてきた民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに、世界の平和と人類の福祉の向上に貢献することを願うものである。

我々は、この理想を実現するために、個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する。

ここに、我々は、日本国憲法の精神にのっとり、我が国の未来を切り拓く教育の基本を確立し、その振興を図るため、この法律を制定する。》

私たちは、教育が<sup>わたくしごと</sup>私事、自分ひとりだけに関係のあること、個人的な営みとして考えられ、矮小化されて考えられているのではないかと思います。しかし、教育は<sup>おおやけごと</sup>公事、公的な性格をもつものです。公共性をもつからこそ、私学教育も含めて「公教育」というのです。

「個人の尊厳を重んじる」とともに、「公共の精神を尊ぶ」という教育基本法前文の教育理念は、個人主義的な目的実現に手段化されている現在の学校教育を、「共に学び合う」学習共同体としてよみがえらせる必要があります。この度の統合が、そのことを共に考えあうよい機会になることを願っています。

教育の目的については、簡潔に次のように述べています。

《教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。》

教育は私<sup>わたくしごと</sup>事として人格の完成を目指すとともに、公教育として平和で民主的な国家及び社会の形成者を目指すという公共性を持つものです。

## 21世紀富士見町の教育新生プラン(学校教育目標)

さて、私たちの町、富士見町では、学校が週五日制になった平成14年度から次の4つの学校教育目標を立てて教育を推進しています。私なりに多少補足して紹介しますと、

- 1、家庭や地域に開かれた学校運営。
- 2、すべての子どもに確かな学力を育てる。加えて、家庭学習の習慣化、学習意欲の向上。
- 3、豊かな心を育てる道徳教育。豊かな読書活動体験。
- 4、一人の淋しい子どももつからない学校。

これら4つに加えて、私は、第5として、「体力の向上」を加える必要があると思っています。

1980年代半ば以降25年間に子どもの体力は著しく低下しています。転び方を知らない子どもたち。肥満傾向の「生活習慣病予備軍」とも言うべき子どもが、この25年間で2倍に増えています。運動不足、食生活の乱れ、不規則な生活リズムなどが原因です。「早寝・早起き・朝ご飯」は、脳科学的にも非常に重要です。

## 4、フィンランドの教育に学ぶ

一方、目を世界に転じて教育立国フィンランドに学ぶべきことが多いと、前にも増して思うようになりました。

ジャーナリストの増田ユリヤさんは、著書『教育立国フィンランド流 教師の育て方』先月、矢嶋町長に紹介された本ですが一の中から、特に印象に残った点を紹介します。

フィンランドは、長く帝政ロシアとベルギーの植民地として苦難の道を歩まされた歴史があります。そのため、祖国を支えていくのは子どもや若者である。資源が乏しいので、教育立国として人材育成をして祖国を支えるという強い自覚があるようです。

増田さんは、フィンランドの教育のキーワードを3つにまとめています。

1つ目。祖国を支える子どもだから、一人の落ちこぼれも出すわけにはいかない。すべての子どもに「質的に平等の教育」を保障する。

人は「みんな違う」ということを、最大限に生かす教育。その象徴的な制度が、就学前教育(プリスクール)と「10年生」です。

#### 就学前教育(プリスクール)

保育所内、小学校内に設置。無償(フィンランドは教育費はすべて無償です)。ほとんどの子どもは小学校入学前に受ける。自分の子どもが小学校に入学するには発達が不十分、未成熟と判断した場合には、保護者は小学校やプリスクールの先生と話し合ったうえで、入学を1年遅らせることができるのです。

#### 「10年生学校」

中学校卒業に際して、希望する普通科高校や職業高校に進学する成績に満たないと考えた場合には、もう1年勉強することができる「10年生」という特別プログラムが準備されている。毎年希望する生徒は3%程度。(徹底した習得主義)

私が大変感動したのは、

《プリスクール、10年生 いずれの場合にも、「1年遅れたから恥ずかしい」というような意識は本人にも周囲にもなく、その子どもの発達や成長に見合った進み方をすることを当然のこととして受け入れられている。》という点です。日本では考えられません。

教育風土、人間観の根本的な違いを思い知らされた感がしました。

2つ目。現場を信頼する。現場に徹底的に任せる。校長は、自分の学校の教師の勤務評定をせず、教師を信頼して、すべてを任せている。

3つ目。その前提になっているのが、質の高い教員養成。30年前から修士号資格取得が条件、教育実習は延べ半年間、大学卒業に5～6年かかるそうです。

PISA(国際学習到達度調査)で「好成績の理由は？」とある女性校長に著者が尋ねたところ、帰ってきた答えは「オペッタヤ！オペッタヤ！オペッタヤ！（教師！ 教師！ 教師！）教師の質の高さです！」。これが合言葉になっていたということです。

「学力世界一」を支えるのは、経験豊かな教師たち。フィンランドのある先生は、教師のやりがいをこう話しています。

《私は教師の仕事が本当に好きです。  
この仕事は同じ日が一つとしてありません。  
子どもたちの様子も毎日違うので、  
それぞれに合った学びを探す努力を続けていかななくては、  
教師の仕事に終りはありませんね。》

以上の3つに加えて、フィンランドでは、他者との「比較の競争」は不健康であると考えているようです。これは日本の教育風土と大きく異なる点です。

「フィンランドは競争をしない社会だと聞いていますが」との質問に、ヘルシンキ大学教育学部の教授が、  
《確かに、フィンランドは他国と競争することを好みません。しかし、EUの一員としてヨーロッパの中で否が応でも競争の中に放り込まれています。その中で、どうやって国の力をキープしていくのか。この国を支えていくのは未来の若者たちです。その若者たちを育てる要となるのが教師。フィンランドの教師にとって、こ

れが最大のモチベーションです。

フィンランド流の競争力というのは、自国がどうやって自分の足で立つかという、いわば内面に向かった競争です。他者と比較する競争は不健康だと考えています。

日本の研究者も言っていましたよ。「社会を築いていくには、違った能力を持ち合わせる事が有効だ。一つのことと争って相手を潰したりするのは意味のないこと。それよりも、各自の優れたところを共有していくことが大きな成功につながる」と。

違う個性をもった同士が、できることとできないことを補い合っ  
て一緒に上がっていくということです。自分ができないことはマイ  
ナスではない。同僚や友人と協力して補い合えばいいのです。》

市場万能主義が急速に広がった日本ではまるで夢物語のよう  
な考え方が、フィンランドではごく当たり前になっている。お国柄  
の違いに私は深く考えさせられました。

**5、統合の準備過程で大事にしていきたいと私が思っている  
事を4点簡潔に申し上げます。**

1つ。統合推進委員会、各部会では、過去の経緯にこだわら  
ずに、富士見町づくりの将来像とも関わって、大所高所から将来  
を見据えた議論を自由闊達にお願いしたいと思います。

2つ。学校の主人公は生徒ですから、生徒の夢や希望、意見  
などを尊重しながら様々な事柄を決めていきたいと考えていま  
す。学校と相談しながら、車座集会で直接顔を合わせて話を聞く  
とか、手紙やアンケートなどで意向を聞き取るなどの工夫をしま  
いと考えています。

開校する前に何度も交流会を実施して、顔見知りになっておく  
ことも大事なことです。親近感をもってスムーズに開校を迎えら  
れるよう、配慮します。

3つ。教職員同士も、合同の職員会議や教科会などをもって、統合に向けて両校の足並みを揃えることも既に始めております。両校の校長・教頭・教務主任と私とで教育の理念や目標などを語り合っているところです。また、校舎の教室等施設設備面でも、新しい発想で教育活動ができないものか、目下検討中であります。この面での先進校の視察もしたいと計画しています。

フランスの思想家 j.j.ルソーは教育学の古典として名高い『エミール』という著書の中で、「農夫のように働き哲学者のように考える」子どもが理想の子ども像だと書いています。すなわち、学力、学ぶ意欲、体力、規範意識、モラル・人間的な豊かな感情、そして「生きる力」をすべての子どもに保障する教育、子どもの人権・学習権・発達権を保障する教育の実現のために、教職員のみなさんには努力していただくこととなります。

当然のことながら、富士見町教育委員会は「豊かな感情と知性を育む教育・学習環境を整備」をはじめ、あらゆる支援を惜しみません。役場全体、町全体をあげて共に協力いたします。

4つ。学校は地域の中にあり、地域住民と共に歩む“地域に根ざした学校教育”を進めることが必要であり、自然な姿でもあります。地域に開かれた開放的な学校運営、地域のみなさんにお出でいただいてご意見をお聞きし、また授業の講師をしていただけるような関係、地域との太い絆をぜひ作り上げていきたいと願っています。そのためのシステム作りが必要であると考えています。

## 結び

以上、新しい中学校のビジョンを共に考え合っていく記念すべき第1回中学校統合推進委員会開催にあたり、貴重な時間をいただいて中学校に寄せる私の「夢」の一端を語らせていただきました。

夢の実現に向けて全力を尽くすことを誓い、私の話を結びます。

このあと、委員会、各部会での自由闊達な議論に期待いたします。ご清聴ありがとうございました。